

遠雷

奏でるもののない豎琴が頼りなげな様子で風に
触れるように、響きはひかりを呑みこんだままだ。
おぼろげな輪郭にしろろじて繋がっている、かた
ちのない熱を帯びながら。透けるようにやさしく
なぞるの。うごかない唇のなかから、わずかに湿っ
た囁きが洩れる。岬では、しろい鳥たちが騒ぎだ
す時刻。ひとしきり鳴いて、羽ばたいたら、ささ
やかな午睡が訪れるわ。

失われることのない白紙に、誰しも頬をうずめて
いる。あたし(たち)が夢のなかで、ときに覚醒の
ただなかにおいて独白するとき、いつもいくつかの
ほつれ目がそこにうまれる。たえずなおかさねら
れていく言・葉によつて、やがてもろともほぐさ
れていく幾つかのそこ……。それらひらかれてい
く独白の空間のひとつひとつに、あてどなく蒔か
れているかざかずのめずらしい種子。いつそう暗い
影に包まれたまま、水をやあらかく含むと、や
がて胚は密かに色づきはじめ、みずみずしいひと
つの皮膚が誰知るとなく微かにはじけだす。

あたし(たち)はすでに一人ではなかった。いくつものうしろ向きの視線につきまとわれたまま、あたし(たち)のあした、それはすでに夥しくあてがわれていくきのう——もはや、かたちをもたないで、反れかかっている。あたし(たち)はすでに類稀なひとつの畸形だった。たえずみずからの、それゆえにすべての、縁という縁をあまねくおしひろげていく無為の襲。それゆえに、あたし(たち)はいっただって無数で。

みしらぬあたし(たち)に抱かれて。愛撫されるこ
とで滅していくあたし(たち)。あたし(たち)の言、
葉、たとえそれは失われた指先。あたし(たち)
をつなぐひとつの纏われた空気。あなたを。あた
しを。あたし(たち)を。包み、蔽う、ひとつの沈
黙。

遠くで雷が轟きはじめる。緑が濡れ、その重なり
の下では影が顫動している。雷が轟きはじめると
きいつも、あたしたちはみずみずしい不安に浸さ
れていく。